

木材保護塗料日本発売40周年 キシラデコールの歴史とこれからの取り組み

日本エンバイロケミカルズ——^{どうしよ}道正伸氏インタビュー

FOCUS-IN

material
product
engineering

日本エンバイロケミカルズ株式会社
http://www.xyladecor.jp/

木材保護塗料として長年親しまれてきたキシラデコールが、今年で発売40周年を迎えた。オイルステインと似た仕上がりでありながら、木材腐朽菌や木材害虫、紫外線から木材を保護する塗料として、発売当初から国内でも広く普及した。今回は、日本エンバイロケミカルズ保存剤事業部事業部長の道正伸氏へインタビューを行い、キシラデコールの歴史とこれからの取り組みについて伺った。

——キシラデコールはどのような背景で生まれた製品ですか。また、日本ではどのように発売されたのでしょうか。

40年前に日本に導入したのが武田薬品工業です。開発元はバイエルの子会社であるデソワークバイエルで、ドイツでの発売とほぼ同時期に日本でも発売しています。武田薬品工業は以前からバイエル社と医薬品の提携があり、木材保存剤ではキシラモンという防蟻剤を先立って1964年に導入していました。当時は木材を保護する塗料は日本に存在していません。オイルステインといわれる塗料はありましたが、紫外線や害虫から木を守るものではないため、木に使う薬というイメージで展開して、建築雑誌のプロモーションや設計事務所、塗料店や塗装店を回ることで、比較的短期間に名前が浸透しました。日本人は無垢材が好きで、木目が好きですね。キシラデコールは木目をそのまま残すので、この点も日本で受け入れられた要因だと思います。

その後、デソワークバイエルから英国の会社を経て、現在はオランダのアクソノーベルが開発元になっています。日本でも武田薬品工業の子会社であった日本エンバイロケミカルズが2005年に大阪ガスグループに移り、現在に至っています。

——40年間の歴史の中で、日本の気候風土や木の材質に合わせるため、独自の研究・開発が行われたと思います。

気候風土が異なるヨーロッパで開発された塗料を、高温多湿の日本にそのまま持って来てうまくいかないのは、他の製品でも同じで、キシラデコールも同様の問題が発生しました。特に木材腐朽菌やカビの菌種が違うため日本向きに組成内容を変更しています。また、日本独自の製品として「キシラデコール やすらぎ」などを開発・発売しました。

——キシラデコールのそれぞれの特徴をお聞かせください。

キシラデコールは非常に優れた塗料です。しかし、それだけでは答え切れていないニーズもあり、補完する製品をつくる必要が出てきました。お客様からの、内装には安全性を考慮した室内専用塗料がほしいという声を反映して、ドイツですでに登場し



キシラデコールのウェブサイト。塗装事例集やカラーシミュレーションのコーナーも充実。上：トップ画像。下：塗装事例集に掲載されている「木材会館」。



『新建築』1974年4月号に掲載されたキシラデコール広告。

ていた水性の「キシラデコール インテリア」を2000年に発売しました。安全性を考慮した塗料で、ドイツの玩具安全基準 [DIN EN71, Part3] にも適合しています。

日本独自の開発としては「キシラデコール やすらぎ」があります。白木に塗る透明の塗料です。日本には白木の文化がありますが、ヨーロッパにはありません。ドイツに開発の依頼をしたのですが、技術的に不可能だという回答だったので、技術陣が発奮して開発しました。透明の塗料で紫外線を防ぐという難題を解決して2002年に発売しています。

キシラデコールは溶剤の臭いがあるので、住宅密集地や商業店舗では扱いにくいという声がありました。そこで低臭性の製品として2009年に「キシラデコール フォレステージ」を発売しました。これも日本独自の製品です。

また、高耐久性の水性ペイント「コンゾラン」という商品も1995年に発売しています。木目を残すのではなく、塗膜をつくるペイント系塗料で、木材の伸縮に追従する柔軟性、木材中の水分を通す通気性、木材の表面にしっかりと食い込む密着性という特徴があります。キシラデコールは木目の風合いを残すステイン系ですが、最初に塗布して約3年後には塗り替える必要があります。その後約5年目安のインターバルで塗り替えるを勧めますが、コンゾランは10年以上経過しても塗膜がしっかり残っている例が数多くあります。劣化が著しい木材への塗装や、破風などの耐久性が必要で塗り替えがたいへんな箇所にお勧めしています。

——木材保護塗料を取り巻く環境は現在どのようでしょうか。

木材保護塗料は、公的なサポートを得ることができずに長年やってきました。国や公的機関に木材保護塗料の必要性を訴えかけてきて、やっと日本

建築学会で検討のテーブルに乗せていただき、建築工事標準仕様書に木材保護塗料塗り (WP) を新設してもらったのが2006年11月です。その後、国土交通省の仕様書にも導入してもらい2010年5月に新設されました。国が木材保護塗料の必要性をはじめて認めてくれたのが昨年ですから、長年の思いがやっと実ったという感慨があります。

また、公共建築物等木材利用促進法が2010年10月にスタートしました。3階建てまでの公共建築物は原則的に可能な限り木造化・木質化を図るということです。さらに、長期優良住宅促進法案も施行され、徐々にではありますが、木材保護塗料にフォローの風が吹いてきていると思っています。

——これからの取り組みについてお聞きます。現在、どのような点に着目して研究・開発していますか。

ひとつは油性と水性の問題があります。キシラデコールは油性ですが、キシラデコール インテリアやコンゾランは水性です。油性は一般には有機溶剤による臭気はありますが、木材との相性が非常にいい。一方、水性は一般の方でも気軽に使えますが、木に馴染ませるのに工夫が必要です。これからは油性と水性をうまく使い分ける時代になると思いますが、それぞれの長所を取り入れてよりよい製品を開発するのが、当社を含めて木材の塗料に関わるすべてのメーカーの課題でしょう。

また、木材もいろいろな種類が出てきました。南洋系の材や不燃材、アセチル化木材、WPC材などいろいろな化学加工材があります。これらに適した塗料の開発も必要です。

これからも使用される方の意見に耳を傾けて、よりよい製品を開発していきたいと思っています。

(2011年1月21日、日本エンバイロケミカルズにて 文責：本誌編集部)